

小・中・大学生を対象とした被服製作用語の知識の実態

Survey of Knowledge on Words about Dressmaking for Elementary School Children, Junior High School Students, and College Students

柏崎真理子・前田 雄也・日景 弥生*
Mariko KASHIWAZAKI, Yuya MAEDA, Yayoi HIKAGE*

要 旨

小学5年生から大学生までの計639名を対象に、小学校家庭科教科書に記載されている被服製作用語について用語に関する知識39項目と技能の自己評価17項目を調査した。その結果、以下のことが明らかとなった。

用語に関する知識では、いずれの項目も小学5年生から中学1年生にかけて「知っている」割合が高くなり、小学校家庭科学習の効果がみられた。しかし、大学生では中学生に比べて減少傾向にあり、小学校で学習したことが定着していないことが示唆された。技能の自己評価では、用語に関する知識と同様に小学5年生から中学1年生にかけて、「できる」割合が著しく増加したが、中学3年生から大学生にかけては男子で減少、女子で維持または減少した。しかし、家庭での裁縫経験がある大学生では、日常使う裁縫技能の項目で「できる」割合は高く、裁縫経験は技能程度を高めることがわかった。

キーワード 小学校家庭科、被服製作用語、用語に関する知識、技能の自己評価、裁縫経験

緒 言

小学校学習指導要領における家庭科の目標¹⁾には、「日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」ことが掲げられ、被服製作実習や調理実習などを通して、その目標を達成することが記載されている。しかし、現代の日本社会は物質的に満たされ、調理や被服製作の技能がなくても生きていける社会になりつつある。そのため、家庭科で児童・生徒が技能・技術を学習することについて問い直す必要があると考える。

いつの時代でも、私たちはその社会に適合した生活を創造していかなければならない。そのために、生活について学ぶ家庭科で、「生活スキル」を学ぶことは意義がある。青木²⁾によると、従来の家庭科教育は、家庭生活が社会との相互関係のもとで営まれるにもかかわらず、かつては、社会との相互関係を位置づけていない家庭生活、社会との相互関係で諸問題や諸矛盾を抱えていない家庭生活を前提とした生活技術や生活技能の習得に主眼がおかれがちであった。生活スキル

は、生活のなかに解決を必要とする新しい問題を発見し、問題を生活構造に照らし、具体的解決によって生活を改善・向上する力であり、また、生活スキルは、「生活を営むために必要な認識と実践」と「生活をつくるために必要な認識と実践」を結びつなぐ力であると定義している。つまり、生活の問題を発見し、どう解決するかという問いを立てることが出発点であると述べている。

また、河村³⁾は、子どもたちが生活にかかわる技能・技術を身につけることについて、「今ここで」必要になるもの、今必要ではないが、将来に向けて必要となるものがあるが、子どもたちが現時点で生活を見つめ、今ここで、将来に向けて必要と思う生活にかかわる技能・技術を身につけること、つまり、習得した技能・技術が自分自身で必要かどうかを判断する能力が大切であると述べている。さらに河村は、生活スキルは単なる技能や技術の習得だけではなく、生活のなかで必要な判断力・総合力を身につけることが必要であり、自身の生活認識を高め、自己認識を深めることが必須であるとしている。

*弘前大学教育学部

Department of Home Economics Education, Faculty of Education, Hirosaki University

そこで、本論文では、家庭科学習の基礎となる小学校家庭科の学習内容がどれだけ身につけているのかを明らかにするために、小学生、中学生および大学生を対象に、小学校家庭科教科書に記載されている被服製作用語の知識の実態を把握することを目的とした。

方法

1. 調査時期および調査対象

1) 調査対象；調査対象者を表1に示す。本研究の目的から、調査対象者は家庭科の学習を始めて間もない小学5年生、小学校での家庭科学習が色濃く残っている中学1年生、卒業間際で小学校と中学校の家庭科学習を行っている中学3年生、小学校の学習から8年~10年経過している大学生（以下、順に小5、中1、中3、大学生とする。）とした。調査対象人数は、小5 110名、中1 197名、中3 189名、大学生 143名である。

2) 調査時期；調査対象を選んだ上記1)の理由より、小5と中1は2007年5月に、中3は同年12月に、大学生は同年10月に実施した。

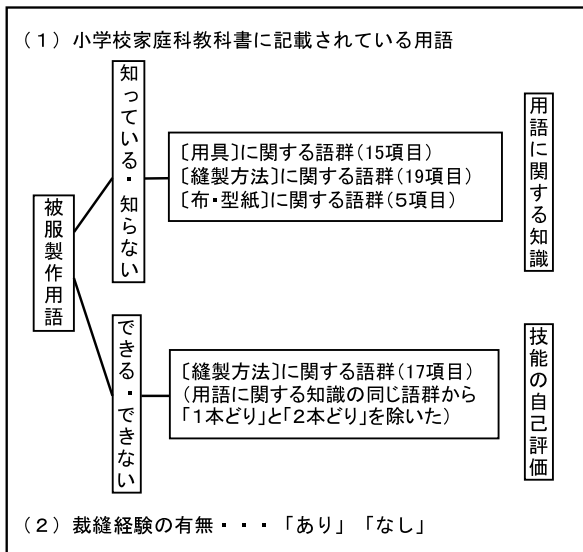
3) 調査内容および方法

調査内容の模式図を表2に示す。調査内容は小学校

表1 調査対象(名)

| | 男子 | 女子 | 計 |
|-------|-----|-----|-----|
| 小学5年生 | 55 | 55 | 110 |
| 中学1年生 | 97 | 100 | 197 |
| 中学3年生 | 91 | 98 | 189 |
| 大学生 | 54 | 89 | 143 |
| 計 | 297 | 342 | 639 |

表2 調査内容



家庭科教科書に記載されている用語と、家庭科の授業以外での裁縫経験の有無を家庭科の授業中に調査した。

小学校家庭科教科書に記載されている被服製作用語は、[用具]に関する語群（以下、[用具]語群）15項目、[縫製方法]に関する語群（以下、[縫製方法]語群）19項目、[布・型紙]に関する語群（以下、[布・型紙]語群）5項目の計39項目で、それぞれについて「知っている」または「知らない」で回答させた。これを、本研究では著者らの先行研究⁴⁾と同様に用語に関する知識とした。また、[縫製方法]語群19項目のうち「1本どり」、「2本どり」を除く17項目については、「できる」または「できない」についても回答させた。これを技能の自己評価⁴⁾とした。これら全ての用語は、図1と図2に示した。

裁縫経験の有無については、「あり」または「なし」で回答させた。

調査用紙の例を表3に示す。

表3 調査用紙の例

| 番号 | 項目 | 1知っている | 2知らない | 3できる | 4できない |
|----|--------|--------|-------|------|-------|
| 1 | 針に糸を通す | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2 | 玉結び | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3 | 玉どめ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4 | ぬいとり | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | ボタン付け | 1 | 2 | 3 | 4 |

結果および考察

1. 用語に関する知識

1) 各調査項目における用語に関する知識

用語に関する知識を項目別に図1に示す。

39項目の「知っている」割合は、総じて女子の方が男子より高く、学年進行により高くなった。しかし、男子の方が高かった項目は小5では「みみ」の1項目、中1では「四つ穴ボタン」「チャコえんぴつ」、「糸切りばさみ」、「裁ちばさみ」、「縫い針」、「まち針」、「巻き尺（メジャー）」、「ものさし」、「ぬいしろ」の9項目、中3では「ピンキングばさみ」、「玉結び」、「よこ糸」、「たて糸」の4項目、大学生では「縫い針」、「巻き尺（メジャー）」、「針に糸を通す」の3項目で、中1では他の学年に比べて男子の方が「知っている」割合が高い項目が多くみられた。また、「足つきボタン」と「ピンキングばさみ」では、全ての学年で「知っている」割合が低かった。さらに、各項目について男女間の有意差を調べたところ、図1に示したように、小5が16項目、中1が10項目、中3が16項目、大学生が24項目で女子の方が男子より優位となった。また、

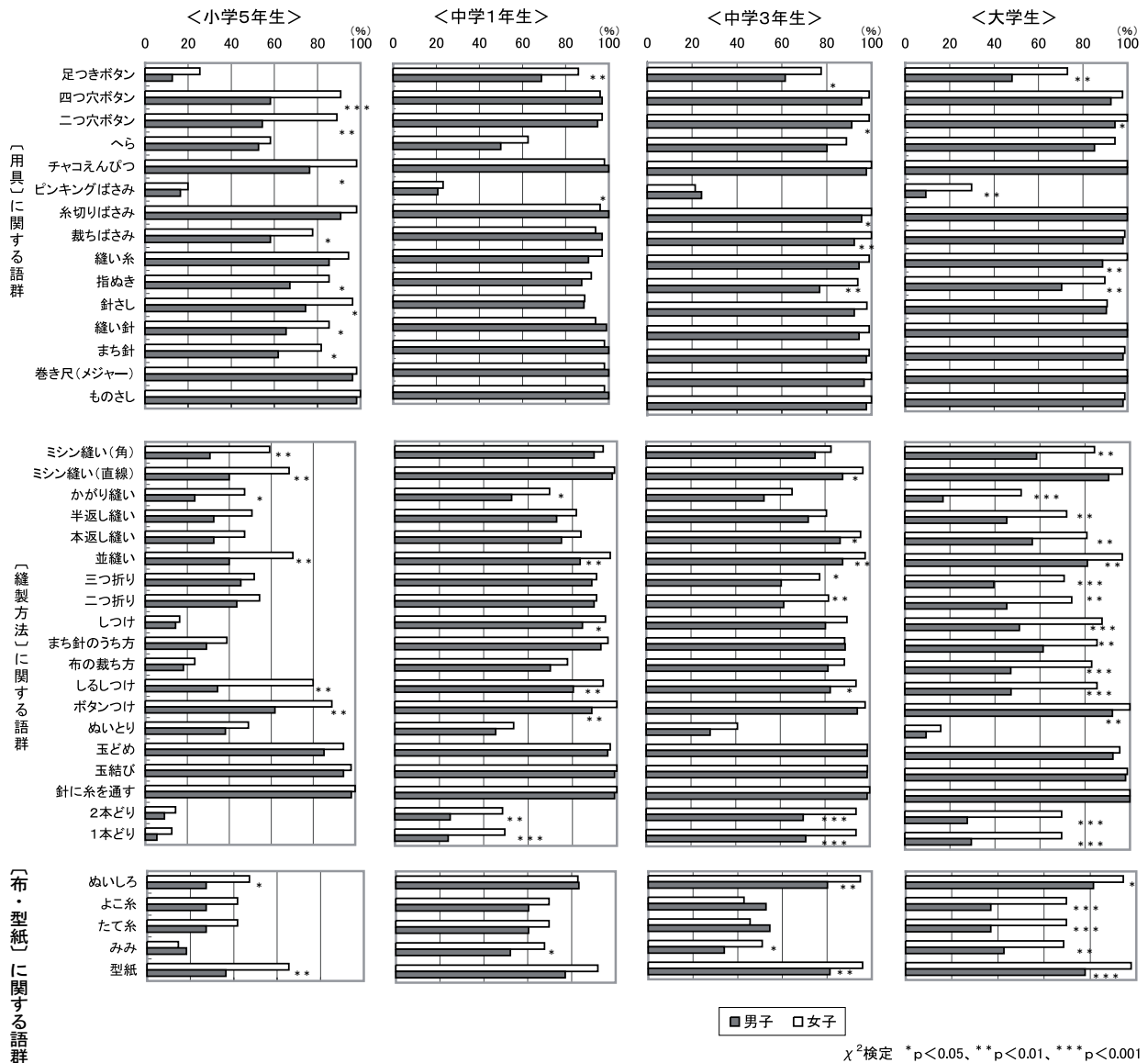


図1 用語に関する知識

「しるしつけ」「並縫い」では、すべての学年で女子の方が優位となった。これより、有意差がみられた項目数は学年進行により増加する傾向がみられた。

〔用具〕語群では、中学生の段階で、「知っている」割合が100%近い項目が多くみられた。しかし、「足つきボタン」では、知っている割合は低く、男子では小5で2.7%、中1で68.8%、中3で61.5%、大学生で48.1%となり、これは女子でも同様だった。また、「ピンキングばさみ」も男女とも同様に低かった。男女間の有意差を調べたところ、小5では8項目、中1では3項目、中3では5項目、大学生では5項目で有意差がみられ、いずれの項目でも女子の方が男子より優位だった。

〔縫製方法〕語群では、「玉どめ」、「玉結び」、「針に糸を通す」など、日常的によく使う項目の「知って

いる」割合はどの学年においてもほぼ100%であった。その他の項目については、中学1年生で「知っている」割合が高くなったが、大学生になると特に男子においてその割合は減少した。男女間の有意差を調べたところ、小5では6項目、中1では7項目、中3では8項目、大学生では14項目で有意差がみられ、いずれの項目でも女子の方が男子より優位だった。

〔布・型紙〕語群では、「ぬいしろ」と「型紙」の「知っている」割合が高く、両項目とも、中3と大学生の男子は約80%、中3と大学生の女子は約95%だった。一方、「みみ」ではその割合が低く、特に小5では男女とも約15%だった。男女間の有意差を調べたところ、小5では2項目、中1では1項目、中3では3項目、大学生では5項目すべてに有意差がみられ、いずれの項目でも女子の方が男子より優位だった。

2) 語群別の用語に関する知識

用語に関する知識を語群別に表4に示す。語群別の「知っている」割合の平均値は〔用具〕(84.1%) > 〔縫製方法〕(70.2%) > 〔布・型紙〕(59.3%)の順となり、〔用具〕に関する語群が他の語群よりも高かった。また、いずれの語群でも「知っている」割合は、女子の方が男子よりも高かった。

表4 用語に関する知識—語群別の「知っている」割合(%)—

| | 男 子 | | | | 女 子 | | | | 平均 |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 | |
| 〔用具〕 | 64.6 | 86.3 | 85.9 | 84.9 | 80.0 | 87.9 | 91.6 | 91.5 | 84.1 |
| 〔縫製方法〕 | 40.9 | 76.6 | 77.9 | 57.4 | 56.1 | 85.2 | 87.6 | 79.9 | 70.2 |
| 〔布・型紙〕 | 27.3 | 66.7 | 60.5 | 55.2 | 42.2 | 76.4 | 66.1 | 80.0 | 59.3 |

小5と中1の「知っている」割合の差は、〔用具〕語群の男子で21.7ポイント、女子で7.9ポイント、〔縫製方法〕語群では男子で35.7ポイント、女子で29.1ポイント、〔布・型紙〕語群では男子で39.4ポイント、女子で34.2ポイントと、いずれも大きく増加した。これは、特に男子で顕著だったが、〔用具〕語群の女子ではそれほど増加しなかった。これは、小5女子の「知っている」割合が80%を超えていたためである。

一方、中3と大学生の「知っている」割合の差は、〔用具〕語群の男子で-1.0ポイント、女子で-0.1ポイント、〔縫製方法〕語群では男子で-20.5ポイント、女子で-7.7ポイント、〔布・型紙〕語群では男子で-5.3ポイント、女子で13.9ポイントとなり、男子では3つの語群とも減少傾向、女子では語群により異なった。これより、〔用具〕語群では男女とも中3の「知っている」割合をほぼ維持しているが、〔縫製方法〕語群では男女とも中3に比べて「知っている」割合は低下

し、〔布・型紙〕語群では男子で低下、女子で向上していることがわかった。

2. 技能の自己評価

1) 各調査項目における技能の自己評価

技能の自己評価を項目別に図2に示す。

17項目の「できる」割合は、総じて女子の方が男子より高く、特に中1と中3で高くなった。男子の方が高かった項目は2項目のみで、中3の「玉結び」と大学生の「針に糸を通す」で、用語に関する知識と比較してその項目数は少なかった。

項目別にみると、「できる」割合は「玉どめ」「玉結び」「針に糸を通す」が全ての学年で高かった。中でも「針に糸を通す」は、女子では小5で98.2%、中1と中3で99.0%、大学生で98.9%となり、男子でも大学生で100%になるなど、男女とも極めて高かった。しかし、「かがり縫い」は他の項目に比べ低く、男子では小5で11.3%、中1で40.2%、中3で42.0%、大学生で11.3%となり、女子でも「できる」割合が最も高かった学年(中1)でも60%に満たなかった。

さらに、各項目について男女間の有意差を調べたところ、図2に示したように、小5が9項目、中1が8項目、中3が6項目、大学生が14項目で、大学生で多くみられた。また、いずれの項目でも女子の方が男子より優位となった。また、「ボタンつけ」「しるしつけ」「並縫い」では、すべての学年で女子の方が優位となった。

2) 語群別技能の自己評価

技能の自己評価を語群別に表5に示す。

「できる」割合は、いずれの学年でも女子の方が男

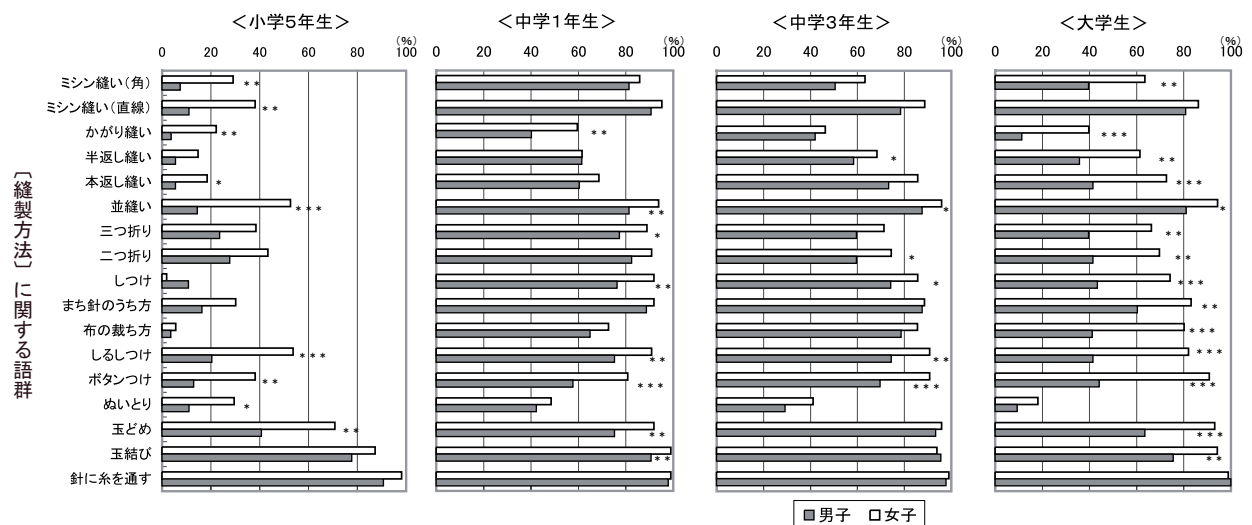


図2 技能の自己評価

χ²検定 *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表5 技能の自己評価

—<縫製方法>「できる」割合(%)—

| 男 子 | | | | 女 子 | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 小5 | 中1 | 中3 | 大学 | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 |
| 22.6 | 73.2 | 71.2 | 50.0 | 39.6 | 83.1 | 80.3 | 74.7 |

子よりも高かった。また、「できる」割合は、男女とも小5から中1にかけて大きく増加し、中1から中3はほぼ同じ割合を維持するが、中3から大学生にかけては減少した。小5と中1の差をみると、男子では50.6ポイント、女子では43.5ポイント、中3と大学生の差は、男子では21.2ポイント、女子では5.6ポイントで、いずれも男子の方が大きかった。これより、被服製作技能は男女とも小5から中1にかけては著しく上達し、中学校段階ではその程度を維持するものの、大学生では後退し、その後退は男子の方が顕著であることが分かった。

3. 裁縫経験の有無

裁縫経験「あり」の割合（以下、「あり」の割合）を表6に示す。

「あり」の割合を学年進行でみると、男子では、小5から中3までは35%前後でほぼ同じ割合だったが、

表6 裁縫経験「あり」の割合(%)

| | 男 子 | | | | 女 子 | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 |
| 「あり」 | 36.4 | 33.0 | 38.9 | 52.8 | 72.7 | 80.0 | 74.5 | 84.3 |

大学生で52.8%に増加した。一方、女子では、小5では約70%だったが、中1では80%に増加し、そこから中3にかけて約5ポイント減少するが、大学生で再び高い値（84.3%）になった。これより、男女ともに学年が進行するにつれて増加傾向がみられ、大学生では調査対象学年の中で最も高い値になった。

次に、同じ学年の「あり」の割合を男女で比較すると、どの学年でも女子の方が男子より高くなった。その差は、小5では36.3ポイント、中1では47.0ポイント、中3では35.6ポイント、大学生では31.5ポイントと、中1で最も差が大きく、大学生で最も小さくなった。大学生で「あり」の割合が高かったことは、一人暮らしの学生が多いことが1つの要因であると推察された。

4. 裁縫経験の有無と技能の自己評価「できる」割合との関係

裁縫経験の有無と技能の自己評価「できる」割合とのクロス集計の結果を表7に示す。

1) 学年進行からみた両者の関係

男子の学年ごとの「できる」割合の平均をみると、縫製経験「あり」のグループ（以下、「あり」のグループ）は小5（9.1%）<中1（25.7%）<中3（29.2%）<大学生（30.5%）と、学年進行に伴い高くなった。しかし、裁縫経験「なし」のグループ（以下、「なし」のグループ）では、小5（13.5%）から中1（47.5%）にかけて増加するが、それ以降は中3（42.1%）、大学生（20.0%）と減少した。

表7 男子の裁縫経験の有無と「できる」割合との関係

| 項目 | 男 子 | | | | | | | | 女 子 | | | | | | | |
|-----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 経験あり | | | | 経験なし | | | | 経験あり | | | | 経験なし | | | |
| | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 | 小5 | 中1 | 中3 | 大学 |
| 針に糸を通す | 37.0 | 33.0 | 36.7 | 51.9 | 53.7 | 64.9 | 61.1 | 48.1 | 70.9 | 80.8 | 73.5 | 85.2 | 27.3 | 18.2 | 25.5 | 13.6 |
| 玉結び | 31.5 | 28.9 | 37.8 | 42.3 | 46.3 | 61.9 | 57.8 | 34.6 | 69.1 | 80.8 | 71.4 | 83.0 | 18.2 | 18.2 | 22.4 | 11.4 |
| 玉どめ | 20.4 | 27.8 | 35.6 | 39.2 | 20.4 | 47.4 | 57.8 | 23.5 | 60.0 | 75.8 | 71.4 | 80.7 | 10.9 | 16.2 | 24.5 | 12.5 |
| ぬいとり | 7.4 | 15.5 | 11.4 | 5.8 | 3.7 | 26.8 | 18.2 | 3.8 | 27.8 | 39.4 | 34.0 | 17.0 | 1.9 | 9.1 | 7.2 | 1.1 |
| ボタン付け | 5.6 | 22.7 | 30.7 | 35.3 | 7.4 | 35.1 | 38.6 | 9.8 | 36.4 | 67.7 | 70.4 | 79.5 | 1.8 | 13.1 | 20.4 | 11.4 |
| しるしつけ | 9.3 | 26.8 | 32.6 | 25.0 | 11.1 | 48.5 | 42.7 | 17.3 | 48.1 | 76.8 | 69.4 | 71.9 | 5.6 | 14.1 | 21.4 | 10.1 |
| 布の裁ち方 | 0 | 25.8 | 34.1 | 26.0 | 3.6 | 39.2 | 44.3 | 16.0 | 3.7 | 61.6 | 67.0 | 68.6 | 1.9 | 11.1 | 18.6 | 11.6 |
| まち針のうち方 | 7.3 | 32.0 | 37.5 | 32.7 | 9.1 | 56.7 | 51.1 | 28.8 | 30.2 | 75.8 | 68.4 | 73.0 | 0 | 16.2 | 20.4 | 10.1 |
| しつけ | 1.8 | 27.8 | 31.8 | 30.8 | 9.1 | 48.5 | 42.0 | 13.5 | 1.9 | 76.8 | 67.3 | 62.9 | 0 | 15.2 | 18.4 | 11.2 |
| 二つ折り | 7.4 | 27.8 | 23.9 | 23.1 | 20.4 | 54.6 | 36.4 | 19.2 | 32.1 | 75.8 | 57.1 | 61.8 | 11.3 | 15.2 | 17.3 | 7.9 |
| 三つ折り | 5.5 | 25.8 | 23.9 | 21.2 | 18.2 | 51.5 | 36.4 | 19.2 | 28.8 | 73.7 | 54.1 | 58.4 | 9.6 | 15.2 | 17.3 | 7.9 |
| 並縫い | 9.1 | 25.8 | 36.4 | 46.2 | 5.5 | 55.7 | 51.1 | 34.6 | 41.8 | 77.8 | 72.4 | 80.9 | 10.9 | 16.2 | 23.5 | 13.5 |
| 本返し縫い | 1.8 | 22.9 | 27.0 | 30.8 | 3.6 | 37.5 | 46.1 | 11.5 | 18.5 | 61.6 | 67.3 | 63.6 | 0 | 7.1 | 18.4 | 9.1 |
| 半返し縫い | 1.8 | 20.8 | 20.5 | 30.8 | 3.6 | 40.6 | 37.5 | 5.8 | 14.8 | 54.5 | 55.1 | 52.3 | 0 | 7.1 | 13.3 | 9.1 |
| かがり縫い | 1.9 | 13.4 | 20.7 | 9.6 | 1.9 | 26.8 | 21.8 | 1.9 | 18.5 | 52.5 | 40.2 | 36.4 | 3.7 | 7.1 | 6.2 | 3.4 |
| ミシン縫い（直線） | 3.7 | 30.9 | 32.2 | 43.1 | 7.4 | 59.8 | 46.0 | 37.3 | 36.4 | 78.8 | 71.1 | 73.6 | 1.8 | 17.2 | 17.5 | 12.6 |
| ミシン縫い（角） | 3.7 | 29.9 | 23.3 | 25.0 | 3.7 | 51.5 | 26.7 | 15.4 | 29.1 | 71.7 | 49.0 | 54.5 | 0 | 14.1 | 14.3 | 9.1 |
| 平均 | 9.1 | 25.7 | 29.2 | 30.5 | 13.5 | 47.5 | 42.1 | 20.0 | 33.4 | 69.5 | 62.3 | 64.9 | 6.2 | 13.6 | 18.0 | 9.7 |

一方、女子の「あり」のグループでは、小5 (33.4%)から中1 (69.5%)にかけて増加し、それ以降は中3 (62.3%)と大学生 (64.9%)ともほぼ同じ割合となった。しかし、「なし」のグループでは、小5 (6.2%)から中1 (13.6%)、および中3 (18.0%)にかけて増加するが、大学生 (9.7%)で著しく減少し、男子の「なし」のグループと同様な傾向を示した。

これより、一度習得した縫製技能は日常生活のなかで実践することで家庭科終了後も維持されることが明らかとなった。

2) 男女別にみた両者の関係

「できる」割合の平均を男子の「あり」と「なし」のグループを各学年で比べると、小5、中1、中3では「なし」のグループの方が「あり」のグループより高くなったが、大学生では「あり」のグループの方が高くなった。一方、女子では、全ての学年で「あり」のグループの方が高くなった。これより、女子では裁縫経験の有無と技能の自己評価との関連が明確にみられたが、男子では大学生のみでみられ、小5、中1、および中3ではみられなかった。

そこで、小・中・高校における家庭科での被服製作学習の影響が少なく、日常生活における裁縫経験の影響が大きいと考えられる大学生男子と女子について詳細にみた。まず、「あり」のグループの「できる」割合が、「なし」のグループのそれより10ポイント以上高かった項目を調べたところ、男子では「玉どめ」「ボタンつけ」「布の裁ち方」「しつけ」「並縫い」「本返し縫い」「半返し縫い」の7項目、女子ではすべての項目がそれにあてはまった。次に、全ての項目について有意差をみたところ、男子では「ボタンつけ」「しつけ」「本返し縫い」「半返し縫い」の4項目で、女子では「針に糸を通す」「玉結び」「ボタンつけ」「まち針のうち方」の4項目で「あり」のグループの方が「なし」のグループより優位になった。10ポイント以上差があり、かつ有意差がみられた項目は、男女とも4項目で、男子では「ボタンつけ」「しつけ」「本返し縫い」「半返し縫い」、女子では「針に糸を通す」「玉結び」「ボタンつけ」「まち針のうち方」だった。これらはいずれも、日常生活でよく使われる技能であるから、学校卒業後も裁縫経験のある人はこれらの「できる」割合が高いことがわかった。また、家庭科教育が終了しても生活の中で裁縫を行っている人は技能程度が向上することが示唆され、布施谷らの報告⁵⁾を検証した。

以上のことより、被服製作技能は小学校家庭科学習

により著しく向上するが、その維持あるいは向上には、日常生活の中での実践が影響することが明らかとなった。そのためには、家庭科教育では技能習得で終始するのではなく、なぜこの技能が必要なのか、どのような時にこの技能は使用するのか、あるいは使用したらよいのか、などについて家庭科の授業で子ども達に理解させるとともに、生活での活用場面を意識した授業構築が求められる。

まとめ

小学5年生から大学生までの計639名を対象に、小学校家庭科教科書に記載されている被服製作用語について用語に関する知識39項目と技能の自己評価17項目を調査した。その結果、以下のことが明らかとなった。

用語に関する知識では、いずれの項目も小学5年生から中学1年生にかけて「知っている」割合が高くなり、小学校家庭科学習の効果がみられた。しかし、大学生では中学生に比べて減少傾向にあり、小学校で学習したことが定着していないことが示唆された。

技能の自己評価では、用語に関する知識と同様に小学5年生から中学1年生にかけて、「できる」割合が著しく増加したが、中学3年生から大学生にかけては男子で減少、女子で維持または減少した。しかし、家庭での裁縫経験がある大学生では、日常使う裁縫技能の項目で「できる」割合は高く、裁縫経験は技能程度を高めることがわかった。

日常生活の実践を高めるためには、家庭科の授業で子ども達に理解させるとともに、生活での活用場面を意識した授業構築が求められる。

謝辞 本研究にご協力頂きました児童・生徒のみなさんと教員の方々に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省. 小学校学習指導要領, 88 (2008)
- 2) 日本家庭科教育学会. シリーズ生活をつくる家庭科 第1巻 個人・家族・社会をつなぐ生活スキル. ドメス出版, 11-27(2007)
- 3) 前掲2) P.42
- 4) 日景弥生, 鳴海多恵子. 被服製作用語に関する知識の実態 - 弘前市内の小学生と大学生を対象として -. 日本家庭科教育学会誌39 (1), 47-53 (1996)
- 5) 布施谷節子, 高部啓子. 家政系女子短大生における手縫いの技能の実態 被服製作の知識と過去の経験との関連性. 日本家庭科教育学会誌43 (4), 273-278 (2001)

(2009.1.14受理)